

## 永井禾原と李伯元

### 入谷仙介

1897（明治30）年、42歳の永井久一郎が、日本郵船会社上海支店長として中国、当時の清国に赴任した。身边には18歳の長男壮吉がいた。壮吉はのちの文豪荷風である。壮吉は数ヵ月で帰国したが、久一郎は3年間その任にあった。彼は多年官界にあり、内務省文部省等を歴任したが、薩長藩閥全盛の当時、尾張出身の自分の前途に見切りをつけ、実業界に転身したものである。

久一郎は禾原かげんと号して、漢詩をよくした。その詩集を「来青閣集」（10巻）という。妻の恒の父は尾張出身の漢学者として著名な驚津毅堂わしづ ぎどうであり、江戸漢詩壇の巨頭大沼枕山ちんざんとも縁戚になる。詩は枕山と森春濤しゅんとうとについて学んだ。春濤は毅堂の弟子で、清朝の艶麗繊細な詩風を鼓吹して、明治初期の漢詩人中の第一人者となった。春濤の子が槐南かいなんで、伊藤博文の漢詩の師として、博文に親近し、ハルビンで伊藤が暗殺された時に、そば杖で重傷を負い、傷がもとで死んだ。父の詩風を継いで一そうの近代味を加え、明治後期漢詩壇の牛耳を執った。禾原は槐南とも親しく、同じ尾張出身の医師で、漢詩人として春濤父子と並称された永坂石埭せきたいとも懇意であり、明治漢詩壇の中枢部にいたるといってよい人物であった。

石埭は弟子に対し「漢詩を作ろうと思えば日本人の詩は絶対に読んではならぬ。中国の詩のみを読み。」と教えたといわれるが、明治時代の本格的な漢詩人は漢詩的感覚を養うために、中国の書物を読むだけでなく、中国人の書画や中国の器物を身边に置き、中国製の文房具を使用し、中国の文人墨客と交わることを好んだ。明治30年代、日清戦争の後をうけて、中国べっ視の風潮が盛んになってきたが、かれら漢詩人の世界にはその影響は少なかった。

禾原もその例外ではなかった。それどころか、もっとも熱烈な中国趣味愛好者であり、在官当時から小石川金富町の邸宅には、中国の雅客の往来が絶えなかった。中国にない花だからと、桜を自邸の庭に植えなかったほどの徹底ぶりである。荷風の随筆に見える禾原の追憶は、つねにその中国趣味とともにであり、小説「新婦朝者日記」「冷笑」にもその面影が写されている。

このような禾原にとって、上海赴任は単なるビジネス上のできごとではなかった。いわば本場へ渡って修業することであったのである。彼は社務のかたわら地元の文人墨客と交わり、青樓の校書に親しんで、艶体詩の情趣を味い、中国各地に詩跡をたずねた。

前置きがやや長くなったが、上海における永井禾原の交友の中に、小説家李伯元がいたことを報告したいがために、禾原という人物と、その上海生活の意味を、まず紹介したのである。

「来青閣集」の中には、李伯元に関係した詩が二首見える。

与董<sup>じゆけい</sup>経<sup>けい</sup>康<sup>こう</sup>李<sup>り</sup>伯<sup>はく</sup>元<sup>げん</sup>宝<sup>ほう</sup>嘉<sup>か</sup>小<sup>せう</sup>田<sup>てん</sup>切<sup>せつ</sup>富<sup>ふ</sup>卿<sup>けい</sup>山<sup>さん</sup>根<sup>こん</sup>立<sup>りつ</sup>菴<sup>あん</sup>彪<sup>ひょう</sup>牧<sup>ぼく</sup>放<sup>ほう</sup>浪<sup>らう</sup>卷<sup>けん</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>郎<sup>らう</sup>郎<sup>らう</sup>天<sup>てん</sup>香<sup>かう</sup>閣<sup>かく</sup>席<sup>せき</sup>上<sup>じやう</sup>賦<sup>ふ</sup>  
贈<sup>くわん</sup>伯<sup>はく</sup>元<sup>げん</sup>（董<sup>じゆけい</sup>経<sup>けい</sup>康<sup>こう</sup>，李<sup>り</sup>伯<sup>はく</sup>元<sup>げん</sup>宝<sup>ほう</sup>嘉<sup>か</sup>，小<sup>せう</sup>田<sup>てん</sup>切<sup>せつ</sup>富<sup>ふ</sup>卿<sup>けい</sup>，山<sup>さん</sup>根<sup>こん</sup>立<sup>りつ</sup>菴<sup>あん</sup>彪<sup>ひょう</sup>，牧<sup>ぼく</sup>放<sup>ほう</sup>浪<sup>らう</sup>卷<sup>けん</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>郎<sup>らう</sup>郎<sup>らう</sup>）  
と天<sup>てん</sup>香<sup>かう</sup>閣<sup>かく</sup>に飲<sup>いん</sup>み，席<sup>せき</sup>上<sup>じやう</sup>に賦<sup>ふ</sup>して伯<sup>はく</sup>元<sup>げん</sup>に贈<sup>くわん</sup>る）（来青閣集卷二）

妝 <sup>た</sup> 楼 <sup>ろう</sup> 焼 <sup>やう</sup> 燭 <sup>とく</sup> 共 <sup>くわん</sup> 銜 <sup>げん</sup> 杯 <sup>はい</sup>	妝 <sup>た</sup> 楼 <sup>ろう</sup> に燭 <sup>とく</sup> を焼 <sup>やう</sup> きて共 <sup>くわん</sup> に杯 <sup>はい</sup> を銜 <sup>げん</sup> み
飲 <sup>いん</sup> 醉 <sup>すい</sup> 人 <sup>じん</sup> 生 <sup>せい</sup> 得 <sup>とく</sup> 幾 <sup>いく</sup> 回 <sup>かい</sup>	飲 <sup>いん</sup> 醉 <sup>すい</sup> 人 <sup>じん</sup> 生 <sup>せい</sup> 幾 <sup>いく</sup> 回 <sup>かい</sup> を得 <sup>とく</sup> るや
好 <sup>こう</sup> 是 <sup>ぜい</sup> 詠 <sup>ぎやう</sup> 花 <sup>か</sup> 吟 <sup>ぎん</sup> 月 <sup>げつ</sup> 去 <sup>こ</sup>	好 <sup>こう</sup> し是 <sup>ぜい</sup> れ花 <sup>か</sup> に詠 <sup>ぎやう</sup> じ月 <sup>げつ</sup> に吟 <sup>ぎん</sup> じて去 <sup>こ</sup> り
又 <sup>また</sup> 能 <sup>よく</sup> 看 <sup>かん</sup> 劍 <sup>けん</sup> 說 <sup>せつ</sup> 兵 <sup>へい</sup> 来 <sup>きた</sup>	又 <sup>また</sup> 能 <sup>よく</sup> く劍 <sup>けん</sup> を看 <sup>かん</sup> 兵 <sup>へい</sup> を說 <sup>せつ</sup> き来 <sup>きた</sup> たる
詞 <sup>し</sup> 場 <sup>ばう</sup> 名 <sup>な</sup> 抵 <sup>たい</sup> 空 <sup>くう</sup> 青 <sup>せい</sup> 価 <sup>か</sup>	詞 <sup>し</sup> 場 <sup>ばう</sup> 名 <sup>な</sup> は抵 <sup>たい</sup> る 空 <sup>くう</sup> 青 <sup>せい</sup> の価 <sup>か</sup>
芸 <sup>げい</sup> 苑 <sup>えん</sup> 人 <sup>じん</sup> 推 <sup>おし</sup> 太 <sup>たい</sup> 白 <sup>はく</sup> 才 <sup>さい</sup>	芸 <sup>げい</sup> 苑 <sup>えん</sup> 人 <sup>じん</sup> は推 <sup>おし</sup> す 太 <sup>たい</sup> 白 <sup>はく</sup> の才 <sup>さい</sup>
写 <sup>しゃ</sup> 出 <sup>しゅつ</sup> 心 <sup>しん</sup> 情 <sup>じやう</sup> 付 <sup>つ</sup> 游 <sup>ゆう</sup> 戲 <sup>ぎ</sup>	心 <sup>しん</sup> 情 <sup>じやう</sup> を写 <sup>しゃ</sup> 出 <sup>しゅつ</sup> して游 <sup>ゆう</sup> 戲 <sup>ぎ</sup> に付 <sup>つ</sup> し
酒 <sup>しゆ</sup> 辺 <sup>へん</sup> 無 <sup>む</sup> 夢 <sup>む</sup> 到 <sup>たう</sup> 金 <sup>こん</sup> 台 <sup>たい</sup>	酒 <sup>しゆ</sup> 辺 <sup>へん</sup> 夢 <sup>む</sup> の金 <sup>こん</sup> 台 <sup>たい</sup> に到 <sup>たう</sup> る無 <sup>む</sup> し

原注 伯元為游戯報主筆（伯元游戯報の主筆為り。）

1898年の作。董康，字は経経，清の進士，民国に入って司法総長に栄進した。伊藤博文が森槐南を従えて上海に遊び，禾原が歓迎の宴を張った時も列席している。小田切富卿は，名は万寿次郎。時に上海領事。職務の関係もあったであろうし，上海在任中の禾原とはひんぱんに往来している。山根立菴，名は彪と，

牧放浪、名は巻次郎とは、日本の漢詩人で、当時上海に、来ていた人々であるらしい。立菴は伯元との交際をこの後も続けていたらしいことは、次の詩からわかる。天香閣は菜館の名。禾原には天香閣雑詩四首があり、よく使っていて、主人とも懇意にしていたようである。後詩にも名が見える。

美人の部屋で、ろうそくをもやして、ともどもに杯を口にふくむ。たのしく酔う機会は人の一生に何回あるのだろうか。あなたは花に月に詩を吟詠していくのがよく、また、剣をながめて兵法を説くにたくみだ。あなたの文壇における名声は高貴葉たる空青の価格にも相当するほど高く、また人々からは大詩人李白同様の才能があると推重される。人間の心情を遊びの中に写しだし、酒の中で金台に行く夢を見ることはない。

第二聯は伯元の才能をほめ、第三聯は伯元の名声をたたえる。空青は銅鈇の中に産物する鈇物。高貴葉とされる。第七句は、伯元の創作活動を「游戲報」主筆の地位に引っかけたもの。金台は天帝の居処、結句の寓意がやや不明瞭だが、伯元に出世の野心がないことをいうのであろう。

前の詩は禾原が董康や伯元を招いたものと思われるが、次の詩は伯元らが禾原を招いたものである。その間に詩はないが、交際は絶えていなかったのちがいない。

己亥歳晩暫回国汪甘卿鍾霖李伯元文実甫廷華設別筵双清別墅席上次山根立菴送別原韻言懷兼志別（己亥の歳晩に暫く国に回らんとす。汪甘卿鍾霖、李伯元、文実甫廷華、別筵を双清別墅に設く。席上山根立菴が送別の原韻に次して懐いを言い、兼ねて別を志す。）

腰纏誰有十万銭	腰 <small>まと</small> に纏 <small>まと</small> う 誰か十万銭有らん
況乃金屋藏嬋娟	況んや乃ち金屋 <small>せんけん</small> に嬋娟を藏するをや
中年禹域寄游跡	中年 禹域 <small>ういき</small> に游跡を寄せ
倦客未比投林鷲	倦客 未だ投林 <small>とび</small> の鷲 <small>とび</small> に比せざ
花天月地酒為友	花天 月地 酒を友と為し
氣求声応詩幾編 <sup>1)</sup>	氣は求め声は応ず 詩 <small>いく</small> 幾編
秦淮江上可賒醉	秦淮の江上 酔 <small>おぼ</small> いを賒 <small>おぼ</small> るべく

邯鄲市上何貪眠 邯鄲の市上 何ぞ眠りを貪らん  
 飽看奇好聖湖景 飽くまで奇好を見る 聖湖の景  
 欲浴温膩驪山泉 浴びんと欲す 温膩<sup>じり</sup> 驪山の泉  
 曾歌濯足大江水 曾て歌う 足を濯<sup>あ</sup>う 大江の水  
 振衣又擬崑崙巔 衣を振うは又た崑崙<sup>こんろん</sup>の巔<sup>いただき</sup> ならんと擬<sup>ぎ</sup>す  
 申江雅客結文社<sup>2)</sup> 申江の雅客 文社を結び  
 吾友簾影<sup>3)</sup>徵詩篇<sup>4)</sup> 吾が友 簾影<sup>れんえい</sup> 詩篇を徵す  
 寒倚楼上梅花画<sup>かんい</sup> 寒倚楼上 梅花の画  
 写出心性芳名伝 心性を写出して芳名伝わる  
 名家題詠紛珠玉 名家の題詠 珠玉紛たり  
 好与画幀同雕鐫<sup>5)</sup> 好し 画幀<sup>てい</sup>と雕鐫<sup>ちようけい</sup>とを同じくするを  
 天香小閣昨同醉<sup>6)</sup> 天香の小閣 昨 酔い<sup>きのう</sup>を同にし  
 徐園今日還開筵<sup>うたげ</sup> 徐園 今日 還た筵を開く  
 臨岐傾尽酒十斗 岐に臨み 傾け尽くす 酒十斗  
 高焼絳燭枝三千 高く絳燭<sup>こう</sup>を焼く 枝三千  
 羯鼓不用名花瓮<sup>かつこ</sup> 羯鼓 用いず 名花<sup>ひら</sup>瓮く  
 紅紅紫紫齊周旋 紅紅紫紫 齊しく周旋す  
 驪歌 唱うを休めよ 曲三疊  
 鶯鶯燕燕嬌姿聯<sup>つら</sup> 鶯鶯 燕燕 嬌姿聯なる  
 兩邦名士一堂會 兩邦の名士 一堂に會し  
 氣邁才俊凌前賢<sup>まい</sup> 氣は邁に才は俊なること前賢を凌ぐ  
 大作先就皆呼快<sup>7)</sup> 大作 先ず就<sup>な</sup>り 皆な快と呼ぶ  
 玉手捧出衍波箋 玉手 捧出す 衍波の箋<sup>えんぱ</sup>  
 詩龍酒虎勢難敵<sup>8)</sup> 詩龍 酒虎 勢 敵し難し  
 杯飛立菴居士前<sup>9)</sup> 杯は飛ぶ 立菴居士の前  
 酒酣與王句難得<sup>さか</sup> 酒酣に與王んなれど句得難し  
 僕夫促駕思凄然 僕夫の駕を促して思い凄然たり  
 梅花含淚若傷別 梅花は涙を含みて別を傷むが若し  
 同雲欲雪黄昏天 同雲 雪ならんと欲す 黄昏の天

新年重会留佳約 新年の重会 佳約を留め  
 分袂笑上東瀛船 袂を分かち笑いて上る東瀛まいつの船  
 同行又有屠龍手<sup>10)</sup> 同行 又た屠龍の手有り  
 前程不怕橫鯨鱸 前程 恐れず 鯨鱸けいせんの横たわるを

原注 1) 余曾刻西游詩付以唱和一卷名曰声応気求集(余嘗て西游の詩を刻し、付するに唱和一卷を以てし、名づけて声応気求集と曰う。)

2) 李伯元結海上文社(李伯元海上文社を結ぶ。)

3) 汪甘卿別号簾影詞人(汪甘卿は別号簾影、詞人なり。)

4) 加課題徐琴仙校書寒倚樓梅花画幀余和次甘卿擬作韻(課題徐琴仙校書寒倚樓梅花画幀を加う。余甘卿に和次して擬して韻を作す。)

5) 甘卿將刻梅花画幀此日懷文来示余(甘卿將に梅花画幀を刻せんとして、此の日文を懐きて来たり余に示す。)

6) 前夕邀同人飲金校書家(前夕、同人を邀えて金校書の家に飲む。)

7) 立菴送別長句一章(立菴送別長句一章を示す。)

8) 立菴詩有詩龍酒虎相蟬聯句(立菴の詩に「詩龍酒虎相蟬聯す」の句有り。)

9) 立菴大戸十斗未醉(立菴は大戸にして十斗なるも未だ酔わず。)

10) 速水子鑑回舟歸東(速水子鑑、舟を回らして歸東す。)

1899年年末の作。禾原は上海在勤中、何回か上海と東京とを往来している。この詩に歌われているものが、その最後の行で、翌春上海に帰任してすぐ、横浜支店長に折返し転任している。詩題に名を列ねているのは主人側の中国人のみで、禾原のほかにも、山根立菴らの日本人がいたのである。汪文二家については知る所がない。注に見える速水子鑑も未詳。あるいは禾原の乗って帰る舟の船長であったか。双清別墅は禾原が博文の歓迎の宴を張った家である。

腰にしぼりつける十万銭など誰が持っていよう。黄金の建物の中にあでやかな美女を住まわせるなど、とんでもないこと。中年になった私は禹王の世界(中国)に旅人の足跡を寄せ、倦みつかれた旅人は林に返る鳶のように故郷に帰ることもかなわない。花咲き月かがやく天地の中で酒を友とし、同類あい求めた詩が何篇か集まった。秦淮の川のほとりで酒を掛買いに酔うがよく、邯鄲の町中では眠りをむさぼってなどいられない。めずらかに面白い西湖の風景をあくまで見、温かでなめらかな驪山のいでゆに湯あみしようとした。ある時は大江の水で足を洗いながら歌い、衣服をふるえば崑崙山頂にいるかという気分になる。

上海の雅客たちは文社を結び、友人の簾影からは詩篇を求められた。その詩

篇を書きつける場所は、寒倚楼上のひとの描いた梅花の画。その画は心のさまを写しだしてかんばしい名が世に伝わる。名家の題詠が珠玉の入り乱れてちりばめられているごとくにならんでいて、画帖とともに印刷されるとよい。

昨日は天香の小閣で諸君とともに酔い、今日はまた徐家の庭園で宴会をもよおす。別れにのぞんで、大杯に十ばいの酒を飲みつくし、高々とした燭台に赤いろうそく三千本をもやす。名花が開くには羯鼓をならずまでもなく、赤い花紫の花一せいに園をめぐって咲く。別離の歌として陽関三疊を歌うのはやめたがよい。別れの歌を私たちのために歌ってくれるうぐいすたち、つばめたちが、かわいい姿をぞろぞろ並べているんだから。

日清両国の名士たちが、こうして一堂に集まり、その人々の気象才知のすぐれたことは、前代の賢者にもまさる。傑作が人より先にできあがると、一座の人々は愉快だと叫び、給仕の女は白い手に衍波の詩箋をささげて持ってくる。一座の面々は詩作の虎、酒飲みの虎ともいうべき豪傑連ぞろい、なかでも一きわ杯の飛んでくるのが立菴居士の前。

酒はたけなわに感興はわきおこるが、馬丁が馬車の用意ができましたとせきたてるので、別れのかなしみに心いたむ。梅の花さえ涙をふくんで別れをかなしんでくれるかのごとくである。雪雲はたそがれの空に今にも雪をふらせそうだ。新年にはまた会おうとめでたい約束を取りかわし、たもとを分かって笑いながら日本の船に乗りこんだ。私と同行してくれるのは龍をほふる勇士であるから、前途にいかなる大魚があろうとも恐れることはないぞ。

腰纏<sup>ようてん</sup>十万銭は、腰に十万貫の銭をしぼりつけ、天下第一の繁華の地である揚州から、鶴にのって昇天したいと願ったという故事。金屋は漢の武帝が、阿嬌<sup>きょう</sup>という美女と結婚できたら、黄金の家に住ませようといった故事。聖湖は西湖の別名。濯足は「楚辞」「孟子」に見える「滄浪歌」の「滄浪の水濁らば吾が足を濯わん」という句をふまえる。羯鼓は楽器の名。唐の玄宗は春の日に羯鼓をならして花を咲かせた。衍波箋は宮中で用いる詩文の用箋だという。

禾原がこののちも李伯元と交際を続けたかどうか、明白でない。しかし、禾原と伯元とに交際があったという事実自体が明治30年代初期の上海文壇における李伯元の位置を測る手がかりとなるであろう。

明治以後の漢詩人の著作は今日、ほとんど忘れさられている。だが、その中にさまざまな興味ある資料が残されているのであり、日中交渉史、日中文人の交流の歴史などを探るためには、掘りおこすべきものがその中にあるのではなかろうか。そのためのささやかな試みが、この拙文である。

(いりたに せんすけ)

付記 卷放浪は朝日新聞上海特派員。のち北京に転勤し、内藤湖南と交渉があった。